

わかやまけん
和歌山県

りょうせいりい はちゅうりい
両生類・爬虫類 ハンドブック

Handbook of Amphibians and Reptiles in Wakayama



和歌山県立自然博物館
Wakayama Prefectural Museum of Natural History

表紙：オオダイガハラサンショウウオ かつらぎ町 (KT)

もくじ
目次

- p.2- はじめに
りょうせいはい はちゅうるい からだ めいしょう
- p.4- 両生類・爬虫類の体の名称
かくしゅ み わ かた
- p.6- 各種の見分け方
み か た
- p.17 ハンドブックの見方
かくしゅかいせつ
- p.18- 各種解説
わかやまけん がいらいしゅ
- p.70 和歌山県の外来種
しゃじ さんこうぶんけん
- p.71 あとがき、謝辞、参考文献
しつびつしゃしょうかい
- p.72 執筆者紹介



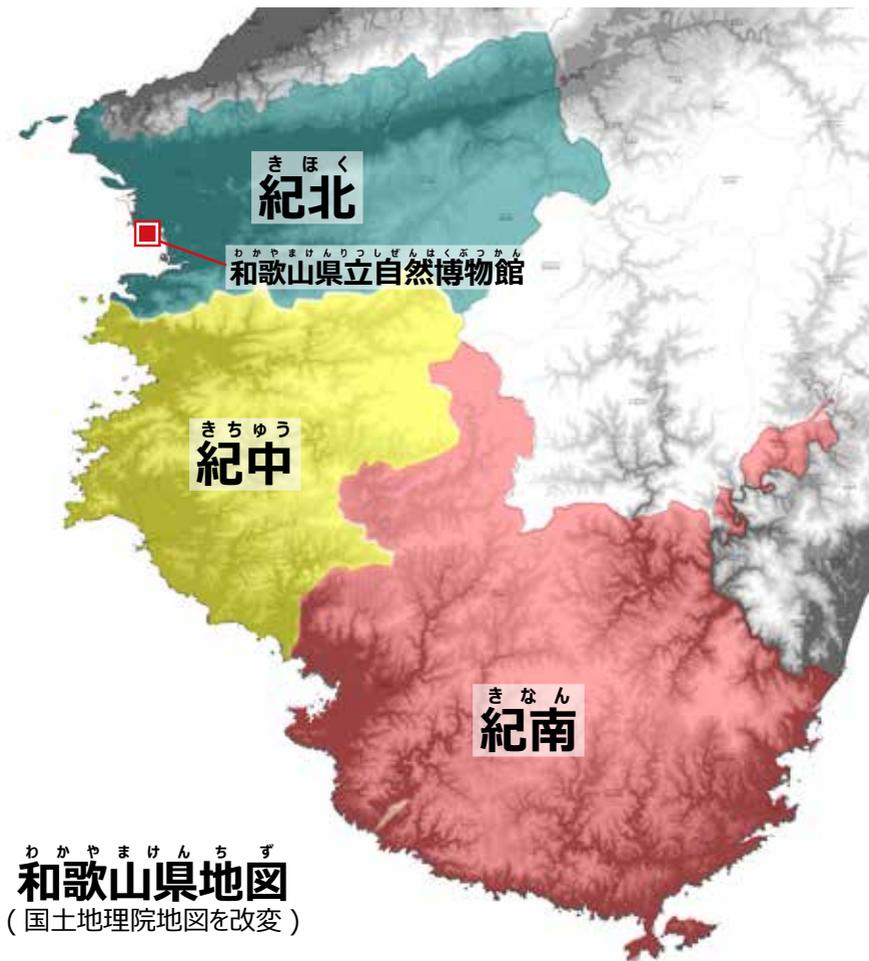
ぜんしん あかいろ ちか
全身が赤色に近いアカハライモリ すさみ町産 (AH) ちようさん

はじめに

両生類とはサンショウウオやイモリ、カエルなど、普通は殻のない卵を産み、幼生（オタマジャクシ）の時は水中で、成体になると陸上で生活する動物です。一方、爬虫類とはカメやトカゲ、ヘビなど、普通は殻のある卵を陸上で産み、幼体は成体と同じ姿で生まれてくる動物です。どちらも世界中に分布していて、とても多様に進化しています。

ここ、和歌山県にも様々な両生類・爬虫類が分布しています。黒潮に乗って移動してくるウミガメ類やウミヘビ類、和歌山県を含む近畿地方を境に分布が西と東に分かれる種（ニホントカゲとヒガシニホントカゲ、ニホンヒキガエルとアズマヒキガエル）、分布の東の端となる種（タワヤモリ、セトウチサンショウウオ）、南の端となる種（モリアオガエル、マホロバサンショウウオ）などが生息する和歌山県は、日本の両生類・爬虫類の分布を考える上で、とても重要な地域となっています。

本書は、そんな和歌山県と大阪府南部、奈良県南部、三重県南部という紀伊半島周辺に分布する種を掲載しています。ぜひ、この本を片手に身近な両生類・爬虫類を探してみましよう！



わかやまけんちず
和歌山県地図
 (国土地理院地図を改変)

このハンドブックで用いた紀北・紀中・紀南の位置を、この地図で表しています。

わかやまけんりつしぜんはくぶつかん
和歌山県立自然博物館

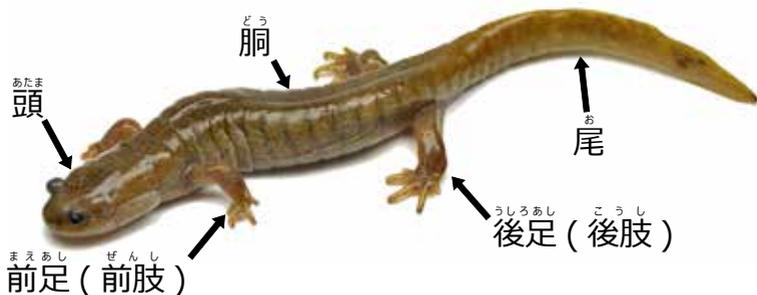
和歌山県立自然博物館は、1982年に開館しました。大水槽から化石の展示まで、水族館と博物館が合わさった全国でも珍しいタイプの博物館となっています。

両生類・爬虫類の標本は2024年時点で約2000点が収蔵されていて、展示室ではサンショウウオ類やカエル類、カメ類が生体展示されています。



りょうせいらい はちゆうらい からだ めいしやう
両生類・爬虫類の体の名称

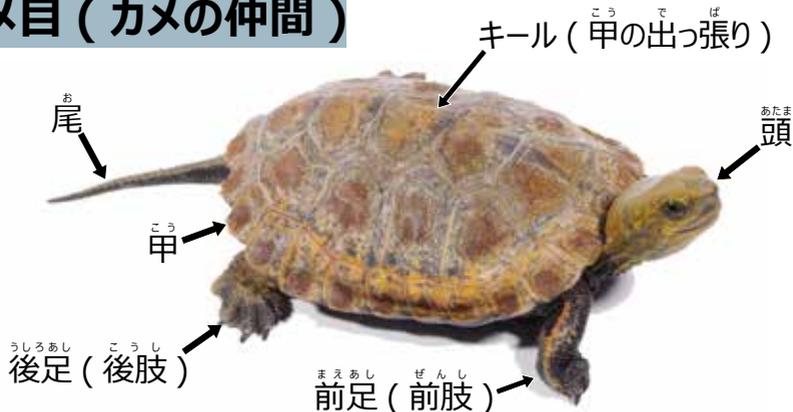
ゆうびもく なかま
有尾目 (サンショウウオ・イモリの仲間)



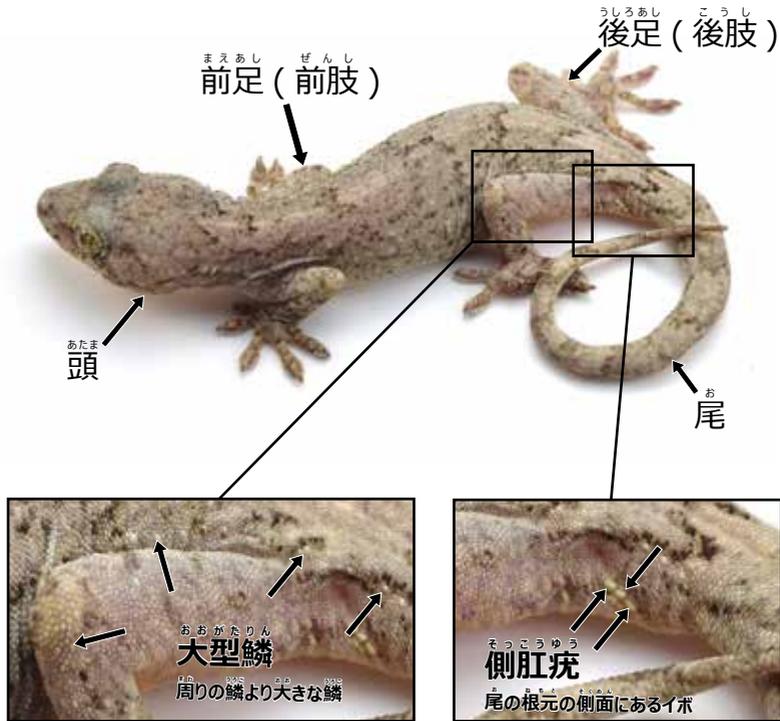
むびもく なかま
無尾目 (カエルの仲間)



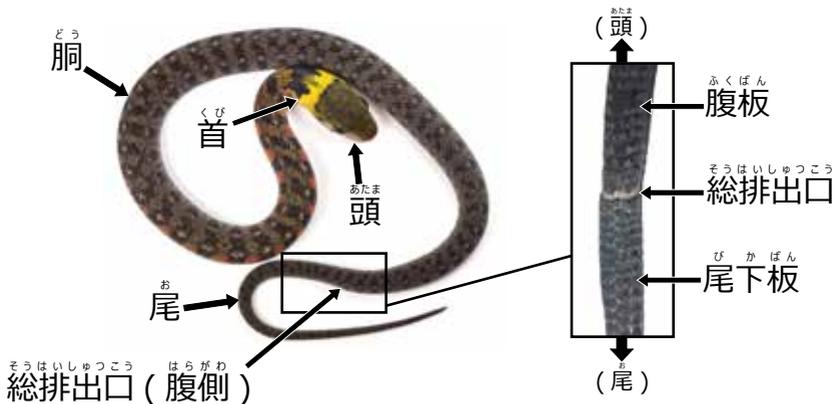
もく なかま
カメ目 (カメの仲間)



ゆうりんもく あもく なかま
有鱗目トカゲ亜目 (ヤモリ・トカゲの仲間)



ゆうりんもく あもく なかま
有鱗目ヘビ亜目 (ヘビの仲間)



かくしゆ み わ かつ
各種の見分け方

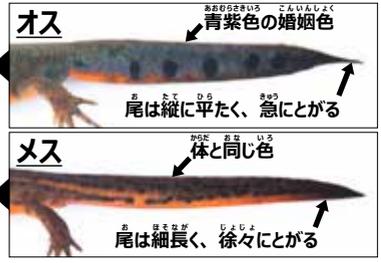
オオサンショウウオ (→ p.24)



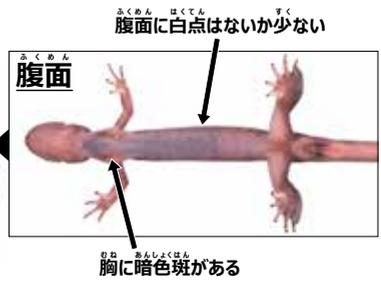
ここでは、種を見分けるときに大切なポイントを書いています。詳しい解説は、各種紹介のページをご覧ください。



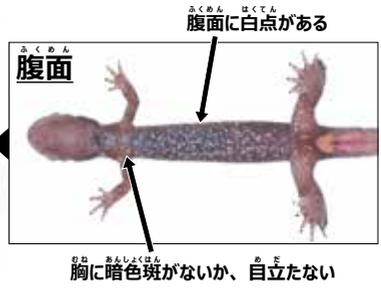
アカハライモリ (→ p.25)



ハコネサンショウウオ (→ p.18)

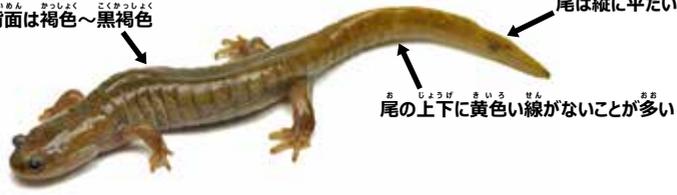


ホムラハコネサンショウウオ (→ p.19)



セトウチサンショウウオ (→ p.20)

背面は褐色～黒褐色



尾は縦に平たい

尾の上下に黄色い線がないことが多い

ヤマトサンショウウオ (→ p.21)

背面は褐色～黒褐色



尾は縦に平たい

尾の上下に黄色い線があることが多い

マホロバサンショウウオ (→ p.22)

背面は黒褐色で、褐色～白色の模様が入る



尾は円筒状で太く短い

オオダイガハラサンショウウオ (→ p.23)

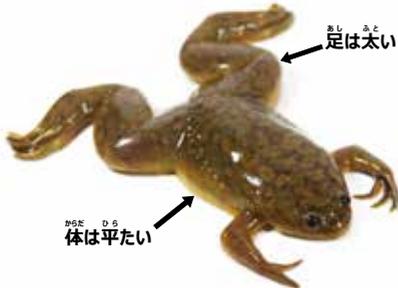
背面は濃い青紫色で、模様はない



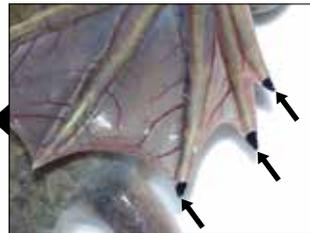
尾は太く、先の方は縦に平たい

アフリカツメガエル (→ p.26)

足は太い

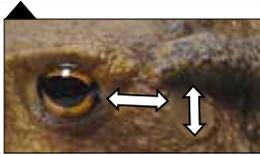


体は平たい



後足第3～5指に爪がある

ニホンヒキガエル (→ p.27)



鼓膜の大きさ(長径)が
目と鼓膜の間の距離とほぼ同じ

アズマヒキガエル (→ p.28)



鼓膜の大きさ(長径)が
目と鼓膜の間の距離の2倍以上

和歌山県にはニホンヒキガエルとアズマヒキガエルの交雑個体がいるため、
正確な同定には遺伝子解析が必要

ナガレヒキガエル (→ p.29)

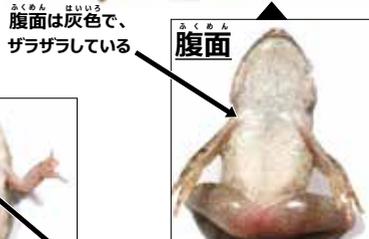


鼓膜はほとんど見えず、
あっても非常に小さい

ニホン・アズマヒキガエルより手足が長い

ツチガエル (→ p.36)

背面は褐色で、大きなイボがある



腹面は灰色で、
ザラザラしている

ヌマガエル (→ p.31)

背面は褐色～緑色で、イボがある



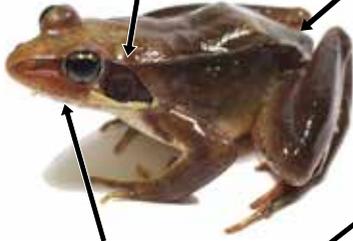
腹面は白く、
ツルツルしている

腹面は白く、
ツルツルしている

ニホンアカガエル (→ p.32)

目の後ろの背側線は曲がらない

背面は褐色～赤褐色

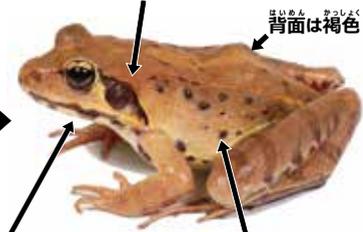
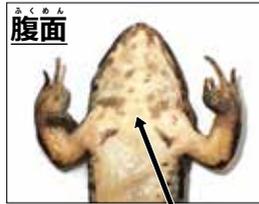


のどは白っぽく、模様はほとんどない

ヤマアカガエル (→ p.33)

目の後ろの背側線は大きく曲がる

背面は褐色



のどは白っぽく、黒い模様が入る

体側に黒い斑点がある

タゴガエル (→ p.34)

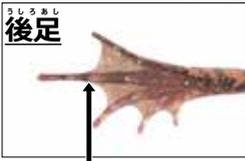
目の後ろの背側線は曲がるか、途切れる



背面は褐色



のどは黒っぽく、細かい模様が入る

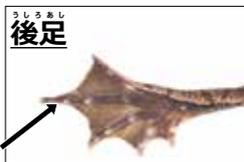


水かきは指中間までしか発達しない

ナガレタゴガエル (→ p.35)

目の後ろの背側線は曲がるか、途切れる

背面は褐色



水かきは指先近くまで発達する

のどは黒っぽく、細かい模様が入る

ニホンアマガエル / ヒガシニホンアマガエル (→ p.30)

褐色の個体

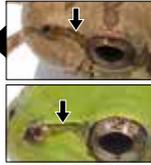
背面は緑色～褐色で、色を変えることができる

緑色の個体

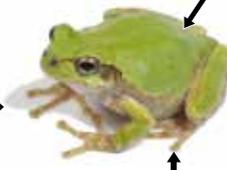
背面は緑色～褐色で、色を変えることができる



指先に吸ばんがある



鼻から目にかけて、褐色の線がある



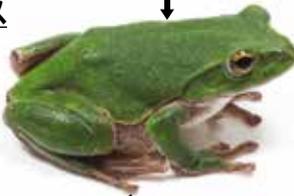
指先に吸ばんがある

和歌山県にいるニホンアマガエルとヒガシニホンアマガエルの間に形態差は見つかっておらず、さらに交雑個体もいるため、正確な同定には遺伝子解析が必要

シュレーゲルアオガエル (→ p.41)

背面は緑色～緑褐色。黄色い斑点が入ることもある

メス



指先に吸ばんがある



目の虹彩は黄色～褐色

オス



オスはメスより小さい

モリアオガエル (→ p.40)

背面は緑色～濃緑色で、黒色の斑紋が入ることもある

メス



指先に大きな吸ばんがある



目の虹彩は赤色～褐色

オス



オスはメスより小さい

カジカガエル (→ p.42)

メス

背面は褐色～濃褐色で、黒っぽい模様が入る



指先に吸ばんがある

オス



オスはメスより小さい

トノサマガエル (→ p.37)



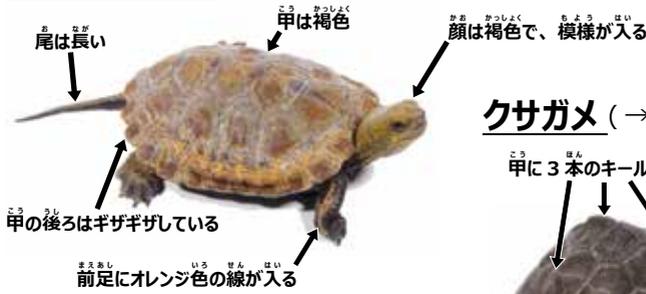
ナゴヤダルマガエル (→ p.38)



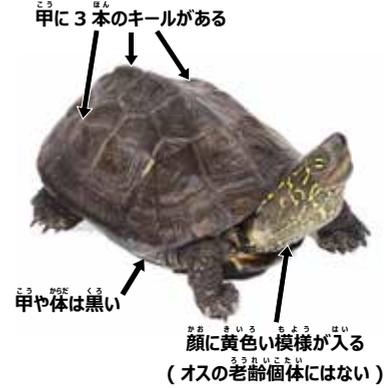
ウシガエル (→ p.39)



ニホンイシガメ (→ p.44)



クサガメ (→ p.43)



"ウンキュウ" (交雑個体) (→ p.45)



ミシシippアカミミガメ (→ p.46)



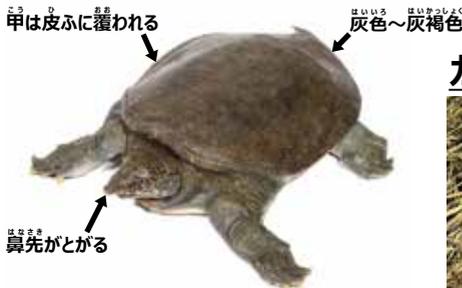
オス老齢個体



幼体



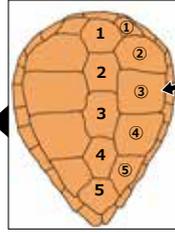
スッポン属の一種 (→ p.47)



カミツキガメ (→ p.48)



アカウミガメ (→ p.49)

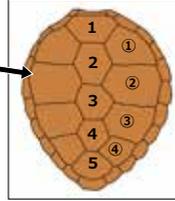


アオウミガメ (→ p.50)

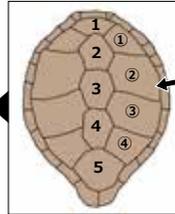
甲は褐色で、卵型



4 対の肋甲板と 5 枚の椎甲板



クロウミガメ (→ p.52)

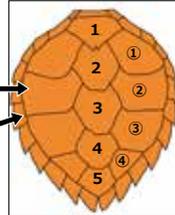


タイマイ (→ p.51)

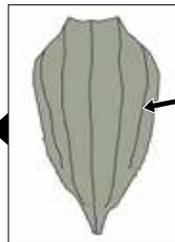
甲は黒と黄色のモザイク模様(べっこう色)



4 対の肋甲板と 5 枚の椎甲板
甲のうろこ(鱗板)が重なる



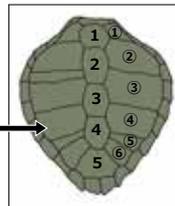
オサガメ (→ p.51)



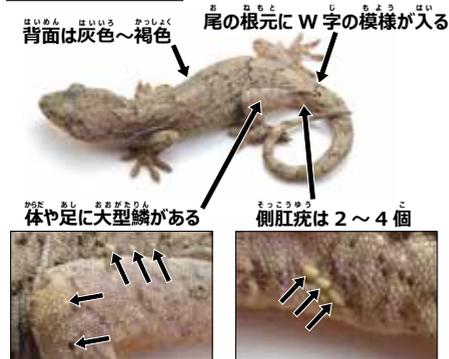
ヒメウミガメ (→ p.52)



6 対以上の肋甲板と
5 枚以上の椎甲板



ニホンヤモリ (→ p.53)



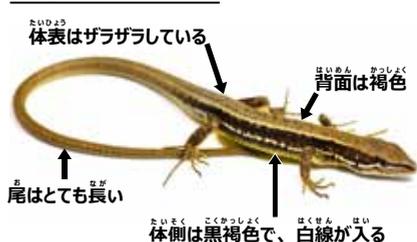
ミナミヤモリ (→ p.55)



タワヤモリ (→ p.54)



ニホンカナヘビ (→ p.58)



ニホントカゲ (→ p.56)



ヒガシニホントカゲ (→ p.57)



ブルーニメクラヘビ (→ p.59)

目が皮ふの下にある



尾の先端はとがる

黒紫色で、体表はスベスベしている

タカチホヘビ (→ p.60)

頭は光沢があり、目は小さい



背面は褐色～黒褐色

シロマダラ (→ p.64)

背面には褐色と黒色の模様がある



頭は黒い

シマヘビ (→ p.61)

背面に4本の黒色の線模様が入る



目の後ろに黒い線

目の虹彩は赤色

模様の薄いシマヘビ



幼体



あずき色で模様は薄い

アオダイショウ (→ p.62)

目の虹彩は灰色～褐色



背面は灰褐色～緑褐色。模様が入ることもある

幼体

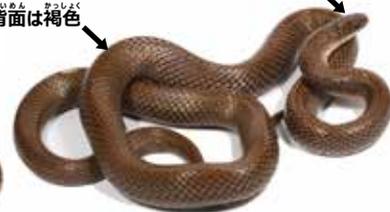


褐色の模様が入る

ジムグリ (→ p.63)

顔に黒い線模様が入る

背面は褐色

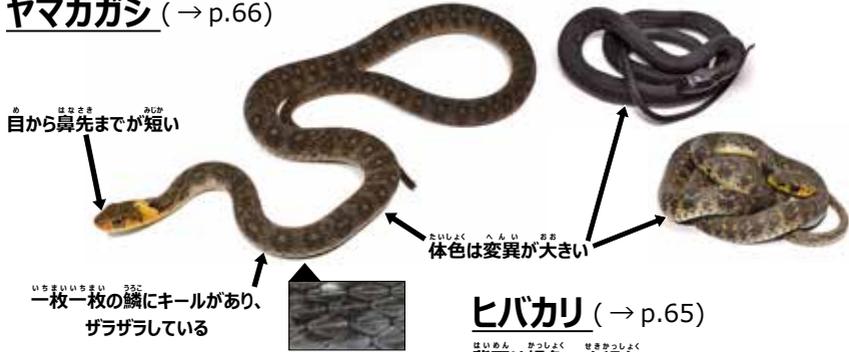


幼体



背面は赤色で、模様が入る

ヤマカガシ (→ p.66)



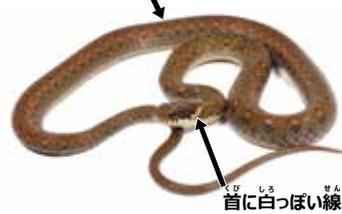
ニホンマムシ (→ p.67)

背面は褐色～黒褐色で、模様が入る



ヒバカリ (→ p.65)

背面は褐色～赤褐色



エラブウミヘビ (→ p.68)

青褐色と褐色のまだら模様



ヒロオウミヘビ (→ p.68)

青と黒色のまだら模様



クロガシラウミヘビ (→ p.69)

黒色と黄白色～灰白色のまだら模様



セグロウミヘビ (→ p.69)

背面は黒色で腹面は黄色



みかた ハンドブックの見方

- ① **和名** .. 日本全国共通の日本語の名前
- ② **学名** .. 全世界共通のラテン語の名前
- ③ **分類** .. 何のグループに属しているか
- ④ **和歌山県レッドデータブック 2022 (→ p.48) のランク、または外来種か、和歌山県でまだ見つからない (未記録) 種か**
- ⑤ **写真解説と写真撮影者**
写真撮影者の略称 (アルファベット順)

平井厚志 (AH)、佐々木歩 (AS)、中津元樹 (GN)、佐藤広康 (HS)、福山伊吹 (IF)、高田賢人 (KT)、神田雅治 (MKa)、小寺昌彦 (MKo)、入江正己 (MI)、吉田誠 (MY)、有本智 (SA)、櫛引颯太 (SK)、松野茂富 (SM)、富森祐輔 (YT)

⑥ 解説

① → **オオダイガハラサンショウウオ**
Hynobius boulengeri (Thompson, 1912)



オオダイガハラ産 かつら町 (KT)



樹木下いた成体、樹幹は陸上で生活する 新宮市 (KT) 1年目の幼生 (左) と 2年目の幼生 (右) 新宮市 (GN)

全長 14 ~ 19 cm。山地の沢周辺に生息する。体色は濃い青紫色で斑紋は普通ない。尾の後半は縦に平たい。サンショウウオ属で最大級の種。幼生は褐色で黒褐色の斑紋があり、指には爪があるがハコネサンショウウオほど発達しない。昆虫やミズカビなどを食べる。繁殖期は 2 ~ 5 月ごろで、沢の岩の下に 1 対の大きなバナナ状の卵嚢を産みつける。幼生期間は半年 ~ 2 年半。マホロバ(サンショウウオ)と同所的に生息するが、体型や体色で見分けられる。日本固有種で、三重県、奈良県、和歌山県の紀伊半島に分布し、全県で天然記念物に指定されている。紀北 ~ 紀南の比較的高く、環境の良好な源流域域にのみ分布する。

25

③ 有尾目

④ 絶滅危惧Ⅰ類

⑤

⑥

ぜんちよう ばなさき お さき なが
全長 .. 鼻先から尾の先までの長さ

たいちよう ばなさき せうはいしゅつこう なが
体長 .. 鼻先から総排出口までの長さ

こうちよう こう たて なが
甲長 .. 甲の縦の長さ

とくていがいらいせいぶつ .. 特に人や生態系などに大きな害を与える可能性のある外来種

じょうけんつきとくていがいらいせいぶつ とくていがいらいせいぶつ こと しよく いちぶ せいせい がいらいせいぶつ
条件付特定外来生物 .. 特定外来生物と異なり、飼育など一部に規制のない外来種

ハコネサンショウウオ

Onychodactylus japonicus (Houttuyn, 1782)

繁殖期直前のオス成体 奈良県 (GN)



産卵前のメス成体 奈良県 (GN)



2～3歳ほどの幼生 奈良県 (KT)

全長 11 ～ 17 cm。山地の溪流周辺に生息する。体色は地域差があり、紀伊半島の個体の背面は黒地にオレンジ～淡いピンク色の縦条や不連続な斑紋を持つ。胸に1対の暗色斑があり、腹面に白点はないか少ない。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は5～7月ごろで、沢の伏流水中の岩に1対の円筒状の卵嚢を産む。繁殖期の成体には黒い爪が生える。幼生には常に爪や足の後縁にひだがある。幼生期間は2年以上。

日本固有種で新潟県～茨城県以西の本州に分布する。和歌山県は分布の南限で、田辺市や新宮市で記録はあるが、近年は見つかっていない。奈良県、三重県にも分布する。

ホムラハコネサンショウウオ

Onychodactylus pyrrhonotus Yoshikawa et Matsui, 2022

有尾目

和歌山県未記録



背の模様が連続したオス成体 三重県 (GN)



背の模様が斑のオス成体 三重県 (GN)



2～3歳ほどの幼生 三重県 (GN)

全長 12～16 cm。山地の溪流周辺に生息する。背面は黒地で、オレンジ～淡いピンク色の縦条や不連続な斑紋を持つ。胸の1対の暗色斑はないか不明瞭で、腹面には小さな白点がある。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は5～7月ごろ。野外で卵嚢は発見されていないが、ハコネサンショウウオと同じように産卵すると考えられる。ハコネサンショウウオと同所的に生息する場合もあり、両種はとてもよく似るが、成体は腹の模様で見分けることができる。日本固有種で石川県、福井県、岐阜県、滋賀県、京都府、三重県、奈良県に分布する。和歌山県での記録はないが、ハコネサンショウウオとして記録されている地域に本種が生息している可能性がある。

セトウチサンショウウオ

Hynobius setouchi Matsui, Okawa, Tanabe et Misawa, 2019



オス成体および卵囊 田辺市 (KT)



黒っぽい林色のオス成体と産卵後まもない卵囊 日高町 (KT)



幼生 和歌山市 (GN)

全長 7 ~ 13 cm。平地から低山地の湿地周辺に生息する。体色は褐色～黒褐色。尾の上下に黄色の条線は普通ないが、一部地域では見られる。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は 12 月下旬～4 月上旬で、紀中・紀南では 12 ~ 3 月、紀北では 1 ~ 4 月と南ほど早い。林縁の湿地や水田脇の水たまり、池などの水中の枝や草に 1 対のコイル状の卵囊を産みつける。繁殖期のオスは喉が白くなる。幼生は 6 月ごろに上陸する。

日本固有種で瀬戸内海周辺の本州、四国と周辺の離島に分布する。和歌山県では紀北から白浜町にかけての沿岸部を中心に見られるが少ない。大阪府にも分布する。

ヤマトサンショウウオ

Hynobius vandenburghi Dunn, 1923

有尾目

和歌山県未記録



黒っぽい体色のオス成体および卵囊 滋賀県 (KT)



白斑の目立つ、産卵前のメス成体 大阪府 (GN)



幼体は白点が目立つ 三重県 (GN)

全長 7 ~ 13 cm。平地から低山地の湿地周辺に生息する。体色は褐色 ~ 黒褐色。上陸直後の幼体 ~ 成体まで尾の上下に黄色の条線があるが、老齢個体では目立たない場合がある。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は 2 ~ 5 月で、林縁の湿地や水田脇の水たまりなどの水中の枝や草に、1 対のコイル状の卵囊を産みつける。繁殖期のオスは喉が白くなる。幼生は 6 月ごろに上陸する。セトウチサンショウウオと同じところでは見られない。

日本固有種で東海から近畿地方に分布する。和歌山県では記録がないが、大阪府や奈良県に分布することから、和泉山脈の南側に本種が分布する可能性がある。

マホロバサンショウウオ

Hynobius guttatus Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019

背面が褐色の成体 橋本市 (GN)



白斑が多い成体 紀の川市 (KT)



幼体。白点が目立つ 日高川町 (GN)

全長 8 ~ 11 cm。丘陵地から山地の溪流周辺に生息する。体色は黒褐色に白～褐色の斑紋が全身に入り、地域や個体によって変異が大きい。尾は円筒状で短い。幼体は黒色で細かい白点がある。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は 4 ~ 5 月ごろで、沢の伏流水中の礫に 1 対のコイル状の卵嚢を産みつける。和歌山県での詳しい繁殖状況は不明だが、温暖なため 3 月から産卵している可能性がある。幼生は卵黄だけで幼体まで成長することができる。日本固有種で東海地方から紀伊半島に分布する。和歌山県は分布南限で、紀北～紀中では内陸部のみに生息するが、紀南では海岸沿いまで全域で見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

オオダイガハラサンショウウオ

Hynobius boulengeri (Thompson, 1912)

有尾目

絶滅危惧Ⅰ類



オス成体と卵囊 かつらぎ町 (KT)



倒木下にいた成体。普段は陸上で生活する 新宮市 (KT) 1年目の幼生 (左) と2年目の幼生 (右) 新宮市 (GN)

全長 14 ~ 19 cm。山地の溪流周辺に生息する。体色は濃い青紫色で斑紋は普通ない。尾の後半は縦に平たい。サンショウウオ属で最大級の種。幼生は褐色で黒褐色の斑紋があり、指に爪がある。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は2 ~ 5月ごろで、沢の岩の下に1対の青く大きなバナナ状の卵囊を産みつける。幼生期間は半年 ~ 2年半。マホロバサンショウウオと同所的に生息するが、体型や体色で見分けられる。

日本固有種で、三重県、奈良県、和歌山県に分布し、全ての県で天然記念物に指定されている。和歌山県では紀北 ~ 紀南の比較的標高が高く、環境の良好な河川源流域にのみ分布する。

オオサンショウウオ

Andrias japonicus (Temminck, 1836)

平井川の国内外来個体 古座川町 (1F)



15 cm ほどの幼体 兵庫県 (GN)



幼生。頭の後から外鰓が出る 京都府 (GN)

全長 30 ~ 120 cm。平地から山地の河川に生息する。体色は褐色で黒い斑紋が全身に見られる。魚類や甲殻類などを食べる。繁殖期は8 ~ 9月ごろで、川岸にできた水中の穴の奥で数珠状の卵塊を産む。本州各地で外来種のチュウゴクオオサンショウウオとの交雑個体が見つかっている。交雑個体は斑紋が小さく、体色が異なる場合が多い。

国の特別天然記念物。日本固有種で岐阜県以西の本州と九州の一部に分布する。和歌山県では高野町大滝で生息記録があるが、1953年の豪雨水害により絶滅したとされる。古座川町平井川には兵庫県産の個体群が移入され、定着している。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

アカハライモリ

Cynops pyrrhogaster (Boie, 1826)

有尾目

準絶滅危惧



陸上を移動するメス成体 田辺市 (KT)



婚姻色が出たオス成体 田辺市 (GN)



越冬幼生 田辺市 (KT)

全長 7 ~ 14 cm。平地から山地の水田、水路、池、溪流などに生息する。体色は背面が黒色、腹面は赤色で黒い斑紋があり、個体によって模様は様々。オスは青紫色の婚姻色が現れる。オスの尾は縦に広く、先端が急に尖り、メスは細長く徐々に尖る。昆虫やオタマジャクシなどを食べる。繁殖期は 4 ~ 7 月ごろで、水中の草に卵を 1 個ずつ包んで産む。幼生は 8 月以降に上陸し、3 年ほど陸上生活をして水中に戻る。

日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では全域で見られ、紀南で多い。他地域よりも溪流環境で多く見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

アフリカツメガエル

Xenopus laevis (Daudin, 1802)



夜間に浅瀬へ現れた成体 田辺市 (KT)



尾が残る姿態中の幼生 田辺市 (GN)



幼生は長いヒゲを持つ 田辺市 (KT)

オスは体長 5 ~ 8 cm、メスは体長 6 ~ 10 cm。湖沼などの止水域に生息する。体色は褐色で黒い斑紋が入る。後足は太く、第 1 指 ~ 第 3 指には名前の由来になった黒い爪を持つ。舌がないので、前足を使ってエサとなる水生昆虫や他のカエルのオタマジャクシを口に掻き込む。幼生は 1 対の長いヒゲを持つ。成体になっても水中で過ごし、水から上がることはほとんどない。日本での繁殖期はよくわかっていないが、春から秋にかけて産卵すると思われる。

アフリカ大陸中南部由来の外来種で、千葉県や静岡県、淡路島、大阪府などで定着が確認されている。和歌山県では田辺市の鳥ノ巣半島とその周辺に定着しており、駆除活動が進められている。

ニホンヒキガエル

Bufo japonicus Temminck et Schlegel, 1838

無尾目

準絶滅危惧



産卵場所にやってきたオス成体 日高町 (KT)



夜間、路上に現れた成体 和歌山市 (KT)



ニホンあるいはアズマヒキガエルの卵塊 紀美野町 (SM)

オスは体長 8 ~ 16 cm、メスは体長 8 ~ 18 cm。海岸近くから山地まで生息する。体色は褐色~黒褐色で、体側に黒色と白色の模様が入る。鼓膜は小さく、自から鼓膜までの距離と同じくらい。鼓膜の上の耳腺が大きい。昆虫やミズ類などを食べる。県内では冬から春にかけて、池や水たまりなどに長いひも状の卵塊を産む。和歌山県では各地でアズマヒキガエルとの交雑個体が見られるため、見た目での種同定は難しい。

日本固有種で、近畿以西の本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では海沿いで見られることが多く、同所的にアズマヒキガエルとの交雑と思われる個体が見られることもある。大阪府や奈良県にも分布する。

アズマヒキガエル

Bufo formosus Boulenger, 1883

夜間に林内を移動する成体 日高川町 (KT)



大型のメス成体 有田川町 (KT)



二ホンあるいはアズマヒキガエルの幼生 白浜町 (GN)

体長 4 ~ 16 cm。海岸近くから山地まで生息する。体色は褐色～黒褐色で、体側に黒色と白色の模様が入る。鼓膜は大きく、目から鼓膜までの距離の2倍くらいある。鼓膜の上の耳腺が大きい。昆虫やミズ類などを食べる。県内では冬から春にかけて、池や水たまりなどで産卵する。卵塊は長いひも状で幼生は全身が黒い。和歌山県では二ホンヒキガエルとの交雑個体が見られるため、見た目での種同定は難しい。

日本固有種で、主に近畿以東の本州に分布する。北海道では国内外来種。和歌山県では山地で見られることが多く、同所的に二ホンヒキガエルとの交雑と思われる個体が見られることもある。奈良県や三重県にも分布する。

ナガレヒキガエル

Bufo torrenticola Matsui, 1976

無尾目

準絶滅危惧



昼間に川沿いに現れた成体 田辺市 (KT)



派手な体色をした幼体。色は個体差が大きい 田辺市 (KT)



繁殖のために集まった成体と卵塊 古座川町 (AS)

オスは体長 7 ~ 12 cm、メスは体長 9 ~ 17 cm。主に山地の渓流域に生息する。体色は褐色で、赤い模様が入る事もあるが変異は大きい。体側に黒色と白~黄色の模様が入る。腹面は黄色っぽい。鼓膜はとても小さく、目から鼓膜までの距離の半分以下。鼓膜の上の耳腺が大きい。昆虫やミズ類などを食べる。春に河川上流で、長いひも状の卵塊を産む。幼生は全身が黒く、口が大きい。成体も幼体も河川の近くにいることが多い。

日本固有種で、中部地方から近畿地方にかけて分布する。和歌山県は分布の南限で、主に山地で見られる。同所的にニホンヒキガエルやアズマヒキガエルが見られることもある。奈良県や三重県にも分布する。

ニホンアマガエル

Dryophytes japonicus (Günther, 1859)



ニホンアマガエルと思われる個体 紀美野町 (AS)

オスは体長^{たいちよう}2～4 cm、メスは体長^{たいちよう}3～5 cm。平地から山地の水田^{すいでん}、草地^{くさち}、森林^{しんりん}などに生息^{せいそく}する。体色は緑色だが、周りの色に合わせて褐色^あや灰色^{かっしよく}などに変^{へん}化^かさせることができる。昆虫^{こんちゆう}やクモ類^{むし}などを食べる。県内での繁殖期^{はんしよく}は3～7月ごろと長く、水田^{すいでん}や水たまり^{みづ}などで小さな卵^{たまご}を複数回^{あつくすうかい}に分けて産む。幼生^{ちひ}は6～10月ごろに上陸^{じやうりく}する。日本^{にほん}では近畿^{きんき}から九州^{きゆうしゆう}の大隅諸島^{おおすみしゆうとう}まで分布^{ぶんぷ}し、朝鮮半島^{ちやうせんはんとう}と中国^{ちゆうごく}、ロシアにも分布^{ぶんぷ}する。和歌山県^{わかやまけん}では紀の川^{きのがわ}以南^{いなん}に分布^{ぶんぷ}するとされるが、ヒガシニホンアマガエル^{ひがしにほんあまがえ}との交雑^{かうざつ}個体^{こたい}も見つかっており、わかっていないことが多い。

ヒガシニホンアマガエル

Dryophytes leopardus Shimada et Matsui, 2025



ヒガシニホンアマガエルと思われる個体 橋本市 (KT)

オスは体長^{たいちよう}約3 cm、メスは体長^{たいちよう}3～4 cm。平地^{へいち}から山地^{さんち}の水田^{すいでん}、草地^{くさち}、森林^{しんりん}などに生息^{せいそく}する。体色は緑色だが、周りの色に合わせて褐色^あなどに変^{へん}化^かさせることができる。昆虫^{こんちゆう}やクモ類^{むし}などを食べる。ニホンアマガエル^{にほんあまがえ}と比べて、本種^{ほんしゆ}は太もも^{ふと}にも黒色^{くろいろ}や白色^{しろいろ}の模様^{もよう}が入ることが多いのが特徴^{とくちょう}とされる。しかし、近畿^{きんき}では両種^{りやうしゆ}のあいだ^{あいだ}に模様^{もよう}の差^さがなく、正確^{せいかく}な同定^{どうてい}には遺伝子^{いでんし}解析^{かいせき}が必要^{ひつよう}である。日本^{にほん}では北海道^{ほっかいどう}から近畿^{きんき}まで分布^{ぶんぷ}し、ロシアにも分布^{ぶんぷ}する。和歌山県^{わかやまけん}では紀の川^{きのがわ}以北^{いほく}と北山村^{きたやまむら}に分布^{ぶんぷ}するとされるが、ニホンアマガエル^{にほんあまがえ}との交雑^{かうざつ}個体^{こたい}も見つかっており、わかっていないことが多い。大阪府^{おおさかふ}、奈良県^{ならけん}、三重県^{みえけん}にも分布^{ぶんぷ}する。

ヌマガエル

Fejervarya kawamurai Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka et Sumida, 2011



成体。水田や用水路でよく見られる 田辺市 (KT)



水に逃げ込んだ成体 田辺市 (KT)



成体。のどや腹は白い 紀美野町 (AS)

オスは体長 3 ~ 4.5 cm、メスは体長 3 ~ 5 cm。平地から低山地の水田周辺に生息する。体色は褐色で、稀に緑色っぽい個体や、背面に 1 本の細い線を持つ個体もある。口に入るサイズの様々な動物を食べる。県内での繁殖期は 4 ~ 8 月ごろで、水田や水たまりで小さな卵塊を複数回に分けて産む。幼生は 6 月以降に変態し、上陸する。ツチガエルに似るが、腹面が白く滑らかなため見分けられる。

日本では本州中部から沖縄諸島まで分布し、関東や対馬のものは国内外来種と考えられている。台湾や中国にも分布する。和歌山県では主に平地で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ニホンアカガエル

Rana japonica Boulenger, 1879

夜間に林内を移動する成体 和歌山市 (KT)



抱接するオス成体(上)とメス成体(下) 海南市 (MI)



ゼリー状の卵塊 有田川町 (KT)

オスは体長 3 ~ 6 cm、メスは体長 4 ~ 7 cm。平地から丘陵地の水田や湿地の周辺に生息する。体色は褐色から赤褐色で、鼓膜の周りが黒い。幼生の背面には 1 対の黒斑があることが多い。昆虫やクモ類などを食べる。県内での繁殖期は 1 ~ 3 月で、水田、湿地、池などにやや平たい球状の卵塊を産む。幼生は 5 ~ 6 月ごろに上陸する。ヤマアカガエルやタゴガエルに似るが、鼻先が尖り、鼓膜の後ろの背側線が直線的なことから見分けられる。日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では紀北から紀中で見られるが非常に少ない。紀南では近年の記録がない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ヤマアカガエル

Rana ornativentris Werner, 1903

無尾目

準絶滅危惧



成体。ニホンアカガエルより黒斑が目立つことが多い 橋本市 (KT)



繁殖期、水中にいたメス成体 紀美野町 (KT)



幼生 日高町 (KT)

オスは体長 4 ~ 7 cm、メスは体長 4 ~ 9 cm。平地から山地の湿地や森林に生息する。体色は褐色で、鼓膜の周りが黒い。体側に黒い斑点が入る。昆虫やクモ類などを食べる。県内での繁殖期は 12 ~ 3 月ごろで、湿地や池、山際の水たまりなどに平たい大きな卵塊を産む。幼生は 5 ~ 6 月ごろに上陸する。成体は林床のほか、水路や水たまりで越冬することもある。ニホンアカガエルやタゴガエルに似るが、鼓膜の後ろの背側線が曲がり、喉は白くはっきりとした黒い模様があるため見分けられる。

日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では全域で見られるが少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

タゴガエル

Rana tagoi Okada, 1928



沢沿いに現れた成体 串本町 (1F)



岩の隙間の奥で鳴くオス成体と卵塊 海南市 (KT)



幼生は白く、腹の卵黄を吸収して育つ 北山村 (KT)

体長 3 ~ 5 cm。丘陵地から山地の沢や森林に生息する。体色は褐色で、鼓膜の周りが黒い。昆虫やクモ類などを食べる。県内での繁殖期は1 ~ 6月で、南ほど早く始まり、標高が高い場所は遅い。沢や林道脇の染み出し、湧水が流れる湿地などで、球状の小さな卵塊を産む。幼生は白く、卵黄を消費して2ヶ月ほどで変態し、上陸する。成体は沢の水中の石の下で越冬する。ヤマアカガエルに似るが、タゴガエルの喉は黒っぽく模様が細かいところから見分けられる。日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ナガレタゴガエル

Rana sakuraii Matsui et Matsui, 1990

無尾目

和歌山県未記録



水中で繁殖に備える成体 奈良県 (KT)



産卵前のメス成体 奈良県 (GN)



卵塊。右の下に産みつけられることが多い 奈良県 (GN)

体長 4 ~ 6 cm。山地の溪流周辺に生息する。体色は褐色で、鼓膜の周りが黒い。昆虫やクモ類などを食べる。繁殖期は 2 ~ 4 月で、開けた溪流中の淵や岩の下にやや平たい球状の小さな卵塊を産みつける。秋に溪流へ移動して水中で越冬し、繁殖期になると水流に乗って繁殖場所に集まる。また、この時期の成体は皮ふがひだ状に伸びる。タゴガエルに似るが、後ろ足の水かき指先までであるところから見分けられる。

日本固有種で関東から中国地方までの本州に分布する。和歌山県で記録はないが、奈良県や三重県に分布するため、和歌山県にも生息している可能性がある。

ツチガエル

Glandirana rugosa (Temminck et Schlegel, 1838)

夜間に路上を移動する成体 紀美野町 (KT)



背面に太い線の入る個体 印南町 (GN)



幼体 海南市 (MI)

体長 4 ~ 5 cm。平地から山地の水田、水路、池、溪流などに生息する。体色は褐色で、稀に背中に淡黄色の太めの線が入る。主にアリなどの昆虫を食べる。県内での繁殖期は5 ~ 9月ごろで、水田や池、水たまりなどの水草に小さな卵塊を複数回に分けて産む。幼生は越冬して翌年の夏までに上陸する。成体は水中で越冬することが多い。ヌマガエルに似るが背面のイボがより発達し、腹面は灰色かつ小さなイボで覆われることから見分けることができる。日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布し、北海道や伊豆大島では国内外来種。和歌山県では山地を中心に全域で見られるが、少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

トノサマガエル

Pelophylax nigromaculatus (Hallowell, 1861)

無尾目

準絶滅危惧



夜間に水田で鳴くオス成体 新宮市 (GN)



メス成体。オスに比べて白っぽいことが多い 有田川町 (KT)



幼体。水辺で見られる 海南市 (MI)

オスは体長 4 ~ 8 cm、メスは体長 6 ~ 9 cm。平地から山地に生息する。体色は緑色、褐色、クリーム色に黒色や褐色の斑紋が入り、背面に緑色やクリーム色の線が入る。オスは成熟すると斑紋が目立たなくなって黄色味をおび、メスは斑紋が黒く目立つ。昆虫やミズ類などを食べる。県内での繁殖期は 4 ~ 6 月ごろで、水田で大きな卵塊を産む。幼生は 6 月以降に上陸する。上陸後は山中でも活動する。

日本では岩手県～関東を除く本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。ロシア、朝鮮半島、中国にも分布する。和歌山県では全域で見られるが、少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ナゴヤダルマガエル

Pelophylax porosus brevipodus (Ito, 1941)

メス成体。斑紋は円形で繋がらない 大阪府 (GN)



鳴嚢を膨らませて鳴くオス成体 兵庫県 (GN)



抱接するオス成体 (上) とメス成体 (下) 兵庫県 (GN)

オスは体長 4 ~ 6 cm、メスは体長 4 ~ 7 cm。平地の水田に生息する。体色は緑色、褐色、クリーム色に黒色や褐色の斑紋が入り、背面に緑色やクリーム色の線が入る個体もある。昆虫やミズ類などを食べる。繁殖期は 4 ~ 7 月ごろで、水田に小さな卵塊を複数回に分けて産む。幼生は 6 月に降に上陸する。上陸後も水田周辺の狭い範囲で活動する。トノサマガエルに似るが足が短く寸胴で、腹面にまだら模様があるため見分けられる。

日本固有種で長野県から広島県までの本州、淡路島、四国に分布する。和歌山県で記録はないが、和歌山市の 7 世紀頃の遺跡から本種のものと思われる骨が見ついている。大阪府、奈良県、三重県には分布する。

ウシガエル

Lithobates catesbeianus (Shaw, 1802)

無尾目

外来種



オス成体。鼓膜が大きく自立つ 海南市 (MI)



小型の幼体。黒い点模様が入る 和歌山市 (KT)



幼生。非常に大きくなる 田辺市 (GN)

体長 11 ~ 20 cm。平地から低山地の池、湖沼、河川などに生息する。体色は褐色～暗緑色で、黒っぽい大きなまだら模様が見られる。オスはメスより鼓膜が大きい。昆虫やアメリカザリガニなど様々な動物を食べる。繁殖期は5 ~ 9月ごろで、池の岸边にシート状の大きな卵塊を産む。幼生は非常に大きくなり、越冬して翌年に上陸する。驚いて逃げる時に鳴き声を出す。

カナダ南部からアメリカ合衆国東部が原産の国外外来種で、日本では特定外来生物に指定されている。北海道から南西諸島、小笠原諸島まで全国に定着している。和歌山県では平地を中心に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも定着している。

モリアオガエル

Zhangixalus arboreus (Okada et Kawano, 1924)

オス成体。梅雨時期の夜間に見かけることが多い 高野町 (KT)



樹上で鳴く、あまり模様のないオス成体 橋本市 (KT)



複数個体によって産み付けられた卵塊 九度山町 (KT)

オスは体長 4 ~ 6 cm、メスは体長 6 ~ 8 cm。平地や山地の森林とその周辺に生息する。体色は緑色で、黒い斑紋を持つ個体もいる。昆虫やクモ類などを食べる。県内での繁殖期は 5 ~ 6 月で、湖沼や水たまり、防火水槽などの水面の上にある木の枝や壁面に、大きめの泡状の卵塊を産む。シュレーゲルアオガエルに似るが、モリアオガエルは成体の体が大きく、目(虹彩)の色は赤みがあり、指先の吸盤が発達するところから見分けられる。

日本固有種で本州、佐渡島に分布する。和歌山県は分布の南限で、橋本市と伊都郡の 3 町のみで見られる。紀中や紀南でも記録はあるが、成体は確認されておらず、詳細は不明。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

シュレーゲルアオガエル

Zhangixalus schlegelii (Günther, 1858)

無尾目



枝の上で鳴くオス成体 高野町 (KT)



夜間、路上に現れたメス成体 有田川町 (KT)



集水樹の上に産みつけられた卵塊 有田市 (KT)

オスの体長は3～4 cm、メスの体長は4～5 cm。平地から山地の水田や湿地周辺に生息する。体色は緑色で、黒っぽく変化することもある。黄色の小さな斑点を持つ個体もいる。県内での繁殖期は3～6月ごろで、水田の畔や湿地、池の岸辺に小さめの泡状の卵塊を産む。幼生は6～8月ごろに上陸する。モリアオガエルに似るが、体は小さく、目(虹彩)の色は黄色く、指先の吸盤がやや小さいことから見分けられる。

日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

カジカガエル

Buergeria buergeri (Temminck et Schlegel, 1838)

産卵のために河川に現れたメス成体 上富田町 (KT)



河川近くの路上に現れたオス成体 有田川町 (KT)



幼生 上富田町 (KT)

オスは体長約 4 cm、メスは体長 5 ~ 7 cm。平地から山地の溪流周辺に生息する。体色は灰色～褐色で、背面に黒っぽい模様を持つ個体もいる。主に昆虫を食べる。県内での繁殖期は 4 ~ 8 月で、溪流の石の下に球状の卵塊を産みつける。オスは岩の上に縄張りを持ち、鳴く。産卵を終えたメスは溪流から移動するため、路上などで見かけることも多い。幼生は 6 ~ 9 月ごろに上陸する。指先には吸盤があり、樹上やコンクリート護岸でも活動できる。日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

クサガメ

Mauremys reevesii (Gray, 1831)

カメ目

外来種



上陸した成体 紀の川市 (SA)



若い個体。甲の3本のキールが目立つ 海南市 (MI)

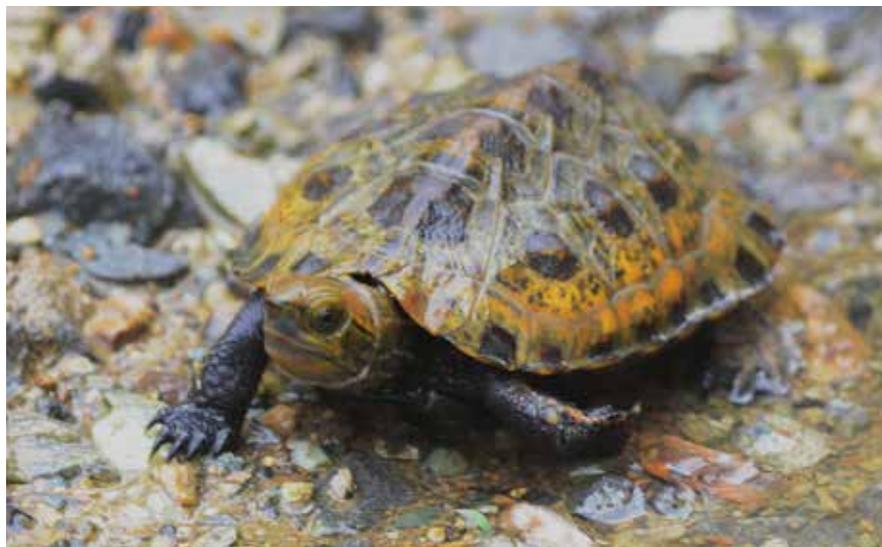


メス成体。年を取るとキールは目立たなくなる 和歌山市 (MI)

甲長は 10 ~ 25 cm だが、メスのほうが大きく、最大で甲長 30 cm ほどになる。主に平地の湖沼や河川に生息する。甲は黒色で、3本のキールがよく発達する。顔には黄色い線模様が入る。魚類から植物まで何でも食べる。産卵期は6 ~ 8月ごろで、岸に穴を掘り、1 ~ 14個の卵を産む。孵卵温度で性別が決まり、28.7℃より高いとメス、低いとオスになる。掴むと臭い匂いを出し、これが和名の由来(臭亀)となっている。

中国や朝鮮半島由来の外来種と考えられており、日本では北海道、本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では主に平地で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ニホンイシガメ

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel, 1838)

顔や甲が明るい色の成体 海南市 (SA)



成体。他種と比べて全身が茶色い 広川町産 (KT)



幼体。甲の後ろ側のギザギザが目立つ 田辺市産 (KT)

甲長 10 ~ 20 cm。メスの方が大きくなる。平地から山地の湖沼や河川に生息する。背甲は褐色で、腹甲は黒くなる。甲の後ろ側がギザギザしている。手足にオレンジ色の線模様が入り、尾は長い。魚類から植物まで何でも食べる。産卵期は5 ~ 8月ごろで、岸に穴を掘り、1 ~ 12個の卵を産む。孵卵温度で性別が決まり、28.8℃より高いとメス、低いとオスになる。

日本固有種で本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では主に平地から低山地の河川で見られるが少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

“ウンキュウ” (ニホンイシガメ・クサガメ^{こうざつこたい}交雑個体)

Mauremys japonica × *M. reevesii*



甲にクサガメとニホンイシガメの特徴を持つ成体 和歌山県産 (KT)



成体。個体によって形態は異なる 和歌山県産 (KT)



甲のキールが目立つ幼体 橋本市産 (KT)

“ウンキュウ” はニホンイシガメとクサガメの交雑個体の通称である。主に平地や山地の湖沼で見つかる。形態はニホンイシガメとクサガメの両方の特徴を持ち、背甲は黒色～褐色で、3本のキールが見られることや、甲の後ろ側がギザギザになることもある。顔にクサガメの様な黄色い模様が入ることもある。魚類から植物まで何でも食べる。交雑による遺伝子浸透でニホンイシガメを絶滅の危機に追いやっているとされるが、その影響は不明な点も多い。

日本各地で記録があり、和歌山県では橋本市や紀美野町、田辺市などで見つかっている。

ミシシippアカミガメ

Trachemys scripta elegans (Wied, 1839)



求愛行動を行うオス成体(左)とメス成体(右) 和歌山市(MI)



甲の模様が自立つ個体 和歌山市(SA)



日光浴を行う成体と幼体 田辺市(MI)

甲長 20～30 cm。メスの方が大きくなる。主に平地の湖沼や河川に生息する。背甲は幼体では緑色だが、大きくなるにつれて黒っぽくなっていく。甲や手足には黄色い線模様が入る。目の後ろには名前の由来にもなった赤い模様が入るが、オスの成体では消える。動物から植物まで何でも食べる。産卵期は5～8月ごろで、岸に穴を掘り、1～23個の卵を産む。

アメリカ合衆国南東からメキシコ北東が原産の国外外来種で、日本では条件付特定外来生物に指定され、全国に定着している。和歌山県では主に平地で見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

スッポン属の一種

Pelodiscus sp.

カメ目

情報不足



和歌山県では紀北の河川でよく見られる 和歌山県産 (KT)



とがった鼻先を水面から出して呼吸する 飼育個体 (MI)



砂の中につまぐ隠れる 和歌山県産 (KT)

甲長は 15 ~ 40 cm。主に平地の湖沼や河川に生息する。甲は皮ふで覆われていて灰色で、模様の変異は大きい。指の間には大きな水かきを持つ。水中生活に特化した形態をしており、魚類や甲殻類などの水生動物を主に食べる。産卵期は 5 ~ 7 月ごろで、川や池の岸に穴を掘り、20 ~ 50 個の卵を産む。日本にはニホンスッポン *P. japonicus* と外来種であるチュウゴクスッポン *P. sinensis* がいるとされるが、両種が交雑していることもあり、形態での識別はとても難しい。

日本全国に分布している。和歌山県では紀の川水系や富田川水系などで見られるが、種は不明である。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

カミツキガメ

Chelydra serpentina (Linnaeus, 1758)



甲長 25 cm 程度のオス個体 千葉県 (YT・SK)

最大で甲長 50 cm。平地の湖沼や河川に生息する。甲は褐色～黒色で、後ろ側はギザギザしている。魚類や甲殻類などを食べる。千葉県では 6 月ごろに 20～40 個の卵を産むことが確認されている。

北アメリカ～南アメリカ大陸原産の国外外来種で、日本では特定外来生物に指定されている。千葉県、東京都、静岡県などで繁殖が確認されている。和歌山県では和歌山市などで捕獲されているが、定着はしていないと思われる。

コラム「和歌山県レッドデータブック 2022」

和歌山県レッドデータブック 2022 では、絶滅の危機に瀕しているとされる 20 種の両生類・爬虫類が選定されていて、下記のランクに分けられています。

- 絶滅** 県内で絶滅したと考えられている種
- 絶滅危惧Ⅰ類** 野生での絶滅の危険性が高い種
- 絶滅危惧Ⅱ類** 絶滅の危機が増大している種
- 準絶滅危惧** 存続基盤が脆弱な種
- 情報不足** 情報が少なく評価が難しい種

オオサンショウウオのように、現在、和歌山県に分布している個体群が全て外来の場合には絶滅のランクに選定されます。

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus, 1758)



その名の通り赤っぽい すさみ町産 (AH)



産卵のために上陸したメス成体 すさみ町 (AH)



ふ化直後の幼体 すさみ町 (AH)

甲長 80 ~ 90 cm。体重約 120 kg。沿岸から外洋に生息する。背甲は赤褐色～褐色で、腹甲は淡黄色。甲は前方で幅の広い涙形で、大きな頭部が特徴。貝類や甲殻類、クラゲ類などを食べる。日本周辺では5～8月にかけて、南日本沿岸の砂浜海岸に上陸し、産卵する。卵数は1回の産卵で80～150個で、産卵期に1～4回ほど産卵を行う。

世界中の温帯域から熱帯域に分布する。国内では主に千葉県以南で産卵し、屋久島が国内最大の産卵地。和歌山県では、みなべ町、白浜町、串本町、那智勝浦町、新宮市の砂浜海岸でほぼ毎年産卵が確認されている。

アオウミガメ

Chelonia mydas (Linnaeus, 1758)

海底で休む個体 串本町 (MKo)



海底で休む個体 串本町 (MKo)



泳ぐ個体 串本町 (MI)

甲長 90 ~ 100 cm。体重約 150 kg。沿岸から外洋に生息する。甲は幅の広い卵型。体色は黒褐色～茶褐色など、成長度合いや個体、地域によって変異がある。頭部は他の種に比べて小さく、上顎と下顎は鋸歯状となっている。脂肪が青色（緑色）なのが名前の由来。海藻や海草、クラゲ類を食べる。世界中の温帯域から熱帯域に分布している。国内では主に屋久島以南の砂浜で産卵する。和歌山県では紀南の沿岸域において、一年中、ダイバーや漁業者などにより確認されている。漁業による混獲や海岸への漂着の記録も多く、これは本種が紀南の海を餌場として利用しているからだと考えられている。

タイマイ

Eretmochelys imbricata (Linnaeus, 1766)



甲の後ろがギザギザになるのが特徴 すさみ町産 (AH)

甲長 70 ~ 80 cm。サンゴ礁の発達した沿岸域に生息する。背甲は黒色と黄色のモザイク模様で、鱗板が瓦屋根のように重なり、縁は尖る。腹甲は黄色。尖ったくちばしが特徴。主にカイメン類を食べる。甲羅（鱗板）がべっ甲の原料となる。近年、食用として

の乱獲や環境破壊などの影響で激減している。

世界中の熱帯・亜熱帯域に分布する。国内では沖縄島以南で産卵を行う。和歌山県周辺では紀南地域で亜成体の混獲や海岸への漂着の記録はあるが、非常に少ない。

オサガメ

Dermodochelys coriacea (Vandelli, 1761)



小型の個体 高知県 (日本ウミガメ協議会)

甲長 130 ~ 180 cm。体重 250 ~ 900 kg。外洋に生息する。背面や体側は黒く、腹面は白い。硬い甲羅（鱗板）はなく、全体が皮ふで覆われ、7本のキールがある。クラゲ類を主に食べる。水深 1000 m を超える潜水能力を

持つことで知られている。

日本を含む世界中の温帯域から熱帯域に広く分布するが、産卵地は東南アジアや中米、アフリカなどの一部地域に限られる。和歌山県では白浜町や串本町、新宮市などで混獲や海岸への漂着の記録はあるが、非常に少ない。

クロウミガメ

Chelonia agassizii Bocourt, 1868



亜成体 三重県産（紀宝町ウミガメ公園）

甲長 80 ~ 90 cm。沿岸から外洋に生息する。生態や姿形はアオウミガメに非常に似ており、後足付け根より後ろの甲がくびれること、腹甲が黒くなるなどで見分けることができる。海藻や海草を食べる。アオウミガメとは別種とする考えと

地域個体群（亜種）とする考えがある。

ガラパゴス諸島やメキシコ東部沿岸周辺など太平洋東部に分布する。国内では沖縄県や福井県、三重県などで記録はあるが少ない。和歌山県での正式な記録はない。

ヒメウミガメ

Lepidochelys olivacea (Ehshscholtz, 1829)



亜成体 小笠原諸島母島 (AH)

甲長 50 ~ 70 cm。沿岸から外洋に生息する。背甲はオリーブ色で腹甲は黄褐色。オリーブヒメウミガメと呼ばれることもある。甲は円形に近い丸型で、ウミガメ類の中では一番小さい。クラゲ類や甲殻類などを食べる。

世界中の熱帯域、亜熱帯域

に分布し、産卵期に数千匹が同じ砂浜に集まる『アリダバ』と呼ばれる集団産卵を行うことで知られている。国内では海岸への漂着や混獲の記録はあるが非常に少ない。和歌山県では串本町で混獲、保護された記録がある。

ニホンヤモリ

Gekko japonicus (Schlegel in Duméril et Bibron, 1836)

有鱗目

外来種



コンクリートの色に合わせて白っぽくなった成体 日高町 (HS)



再生尾のため、尾の様相が異なる個体 紀の川市 (HS)



卵の殻。同じ所に複数個体が産むことも多い 和歌山市 (KT)

全長 10 ~ 16 cm。平地から山地に生息し、特に人家周辺でよく見られる。体色は灰色～褐色で、背面に黒色や白色の模様が入る。周囲に合わせて体色を明るくしたり暗くしたりすることができる。体と手足に大型鱗が混ざり、側肛疣が左右に2～4個ずつ、尾の付け根にW字の模様が入るのが特徴。昆虫やクモ類などを食べる。5～7月、家屋や岩の隙間などに貼り付く卵を一度に2個産む。

中国大陸由来の外来種で、琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県でも市街地を中心に全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

タワヤモリ

Gekko tawaensis Okada, 1956

成体。再生尾のため、尾と体の色が異なっている 和歌山市 (KT)



白っぽい体色になった成体 和歌山市 (HS)



若い個体 和歌山市 (HS)

全長 10 ~ 14 cm。平地から山地に生息する。体色は灰色～褐色で黒っぽい模様が入る。周囲に合わせて体色を明るくしたり暗くしたりすることができるが、背中中の模様が消えることはない。体と手足の鱗は同じ大きさで、側肛疣が左右に1個ずつあるのが特徴。昆虫やクモ類などを食べる。6～8月に、海岸や林の岩の隙間に貼り付く卵を一度に2個産む。

日本固有種で、本州、四国、九州の瀬戸内海側と周辺の離島に分布する。和歌山県では非常に少なく、和歌山市の数が所でのみ生息が確認されている。大阪府にも分布する。

ミナミヤモリ

Gekko hokouensis Pope, 1928

有
鱗
目

外
来
種



海岸で活動する成体 有田市 (KT)



再生尾のため、尾と体の模様が異なる個体 有田市 (KT)



周囲に合わせて明るい体色になることもできる 有田市 (KT)

全長 8 ~ 14 cm。主に平地や低山地に生息する。体色は灰色～褐色で、背には縦に連続した黒い模様が入る。周囲に合わせて体色を明るくしたり暗くしたりすることができる。体には大型鱗が混じるが、手足の鱗は同じ大きさで、側肛疣が左右に 1 個ずつあるのが特徴。昆虫やクモ類などを食べる。沖縄島では 4 ~ 8 月に、海岸の岩場や樹木、家屋の隙間などに貼り付く卵を一度に 2 個産むとされるが、和歌山県でも同様であると思われる。九州南部から琉球列島、台湾、中国東部が本来の分布域で、和歌山県のは国内外来種の可能性が高い。有田市の一部の海岸と周辺の家屋に定着している。

ニホントカゲ

Plestiodon japonicus (Peters, 1864)

日光浴する成体 海南市 (MI)



顔の赤いオス成体 紀美野町 (AS)



ムカデ類を食べる幼体 紀美野町 (AS)

全長 9 ~ 19 cm。平地から山地に生息する。体色は成体では褐色だが、幼体は黒色で 5 本の白い縦線が入り、尾は青色。前額板は接することが多い。昆虫やクモ類などを食べる。繁殖期は 5 ~ 6 月で、石の下に 6 ~ 15 個の卵を産む。メスは卵がふ化するまで世話をする。ニホントカゲにはヒガシニホントカゲと同様の形態を持つものがあるため、形態で見分けることは難しい。

日本固有種で、近畿地方以西の本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では有田川以北に分布するとされるが、正確な分布域は不明。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ヒガシニホントカゲ

Plestiodon finitimus Okamoto et Hikida, 2012



岩の隙間から出てきた成体 田辺市 (SM)



木に上る幼体 神奈川県 (MKa)



ニホントカゲ的な形態のメス成体 神奈川県 (MKa)

全長 9 ~ 19 cm。平地から山地に生息する。体色は成体では褐色だが、幼体は黒色で 5 本の白い縦線が入り、尾は青色。前額板は接しないことが多い。昆虫やクモ類などを食べる。繁殖期は 5 ~ 7 月で、石の下に卵を産む。メスは卵がふ化するまで世話をする。ヒガシニホントカゲにはニホントカゲと同様の形態を持つものがあるため、形態で見分けることは難しい。

北海道、近畿地方以东の本州と周辺の離島に分布する。和歌山県ではありだが、田川以南に分布するとされるが、正確な分布域は不明。奈良県、三重県にも分布する。

ニホンカナヘビ

Takydromus tachydromoides (Schlegel, 1838)

草に上る成体 海南市 (MI)



草原の中を移動する成体 和歌山市 (KT)



日光浴する成体 紀美野町 (AS)

全長 19 ~ 27 cm。平地から山地に生息する。体色は褐色で、体の側面に白い線模様が入る。背には大きな鱗が並ぶため、触るとザラザラしている。昆虫やクモ類などを食べる。繁殖期は春から夏で、石の下に1回あたり2 ~ 9個の卵を、2 ~ 3回産む。長い尾をうまく使い、草や低木の上を素早く走り回る。地面に穴を掘り、その中で冬眠する。

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では平地や低山地で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ブルーミニメクラヘビ

Indotyphlops braminus (Daudin, 1803)

有鱗目

外来種



成体。鱗や小さな目が確認できる 沖縄県 (KT)



夜間には地上を移動することもある 沖縄県 (KT)



幼体 沖縄県 (GN)

全長 10 ~ 18 cm。平地に生息し、人家周辺や耕作地などで見られる。体色は黒紫色。脱皮前は青白くなる。主にアリやシロアリを食べ、特にシロアリを食べる時には頭部を咬みちぎり、胸部と腹部だけを呑み込むことが知られている。沖縄県での調査によると、本種は6 ~ 7月に1 ~ 6個の卵を産み、卵は40 ~ 50日後にふ化した。単為生殖で繁殖し、オスは見つかっていない。世界中の熱帯・亜熱帯地域を中心に分布する。ほとんどの地域では外来種と考えられており、日本の個体群も外来種とされる。琉球列島、小笠原諸島、八丈島などの島々と九州を中心に太平洋側のいくつかの地域で見つかっている。和歌山県では白浜町で確認されている。

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869



茶色っぽい体色の成体 古座川町 (1F)



灰色っぽい体色の成体 印南町 (GN)



幼体。成体と比べて黒っぽい 古座川町 (1F)

全長 30 ~ 60 cm。平地から山地に生息し、主に森林で見つかる。成体の体色は褐色で背中に黒い線が入る。幼体は全身が黒褐色。尾下板が対にならず、一列なのが特徴。主にミズ類を食べる。6 ~ 8 月に 3 ~ 11 個の卵を産む。卵は秋にふ化する。夜行性で、日中は石や倒木の下などで見つかる。皮ふが鱗の隙間から露出しているため、乾燥に弱く、路上や側溝で干からびていることもある。

本州、四国、九州と周辺の離島に分布する。和歌山県では海岸近くから山地まで全域に分布するが、夜行性のため見かけることは少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

シマヘビ

Elaphe quadrivirgata (Boie, 1826)



トノサマガエルを捕らえた成体 海南市 (MI)



カラスヘビと呼ばれる黒化型の成体 高野町 (KT)



湿地を泳ぐ成体 田辺市 (SM)

全長 80 ~ 150 cm。平地から山地に生息し、水田などを中心に様々な環境で見つかる。体色は変異が多いが、成体は基本的に褐色で、背面と側面に黒色の縦縞を4本持つ。目(虹彩)が赤みがかかるのが特徴で、目の後ろには黒い線が入る。カラスヘビと呼ばれる黒化型も見られるが、多くない。幼体は赤褐色で、背面に褐色の模様が不規則に入る。カエル類やトカゲ類などを食べる。交尾期は4 ~ 6月で、7 ~ 8月に3 ~ 16個の卵を産む。昼行性で、日中に日光浴や採餌をするのがよく観察される。琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

アオダイショウ

Elaphe climacophora (Boie, 1826)

昼間に活動する成体 紀の川市 (AS)



薄く縞模様に入った成体 海南市 (SA)



幼体は褐色の模様が目立つ 海南市 (KT)

全長 110 ~ 200 cm。平地から山地に生息し、人家の周辺でよく見つか
 る。体色は灰褐色～緑褐色で、背面から側面に暗色の縦縞を持つこともあ
 る。目の後ろに黒い線が入る。幼体は体色が明るく、はしご形の模様を持つ。
 ネズミ類や鳥類などを食べる。交尾期は5～7月で、7～8月に3～17
 個の卵を産む。特に幼体は夜間に見つかることもあるが、基本的には昼行性。
 木登りが上手く、樹上で見つかることも珍しくない。
 琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。
 大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ジムグリ

Euprepiophis conspicillatus (Boie, 1826)



昼間に活動する成体 田辺市 (KT)



幼体。体色は赤と黒で大変派手 海南市 (KT)



背面に模様が入った成体 印南町 (GN)

全長 70 ~ 100 cm。平地から山地に生息し、森林や耕作地で見つかる。成体の体色は褐色で赤みがかかることもある。頭部に黒い線が入る。腹面には四角い黒斑が不規則に入る。幼体は鮮やかな赤色で明瞭な黒色の横斑が入る。頭部や腹面に全く模様がない個体もしばしば見つかると、アカジムグリと呼ばれる。主にネズミ類やモグラ類を食べる。交尾期は4 ~ 6 月で、7 ~ 8 月に3 ~ 7 個の卵を産む。昼行性で低温を好み、春や秋頃によく見つかる。琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県では山地で見られることが多く、平地では少ない。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

シロマダラ

Lycodon orientalis (Hilgendorf, 1880)

林床を移動する成体 古座川町 (1F)



首元の白斑が目立つ若い個体 田辺市 (KT)



林道に出てきた成体 紀美野町 (GN)

全長 40 ~ 70 cm。平地から山地に生息し、主に森林で見つかる。体色は背面が灰褐色～褐色で、黒色の帯状の模様が入る。幼体では、体色が明るいことが多く、首元の白い模様が目立つ。主にトカゲ類を食べる。6 ~ 8 月に 1 ~ 9 個の卵を産む。夜行性で日中は岩の割れ目やコンクリート壁の水抜きパイプ内などで見つかる。幻のヘビとして取り上げられることもあるが、夜行性で人目につきにくいだけで、場所によっては必ずしも珍しいヘビではない。琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ヒバカリ

Hebius vibakari vibakari (Boie, 1826)



背の模様が強く出た成体 古座川町産 (KT)



背にあまり模様が出ていない成体 海南市 (SA)



幼体。成体より黒っぽい 串本町 (MI)

全長 40 ~ 60 cm。平地から山地に生息し、主に水辺で見つかる。体色は褐色～赤褐色で首元に淡黄色の線模様が入る。背に白色や黒色の斑点模様が入ることもある。魚類やカエル類などを食べる。1匹のメスに複数のオスが集まって交尾を行う。7～8月に4～10個の卵を産み、卵は1ヶ月ほどでふ化する。朝や夕方によく活動する。泳ぎが巧みで、水中にいるオタマジャクシや魚類を水に飛び込んで捕らえることができる。

本州、四国、九州に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ヤマカガシ

Rhabdophis tigrinus (Boie, 1826)

水路の中を移動する成体 紀美野町 (AS)



首の黄色が目立つ若い個体 田辺市 (KT)



ヌマガエルを捕食する成体 海南市 (AS)

全長 60 ~ 120 cm。平地から山地に生息し、水田などを中心に様々な環境で見つかる。成体の体色は非常に多様。和歌山では黄褐色や緑褐色で、黒斑や朱色の斑紋はあまりはっきりしないことが多い。首元に黄色の帯状模様が入ることもあり、特に幼体ではより鮮やか。カエル類を好んで食べる。交尾は10 ~ 11月に行い、6 ~ 8月に2 ~ 27個の卵を産む。有毒で、上顎の奥にある牙の付け根から染み出す捕食用の毒と、首の頸腺と呼ばれる器官にヒキガエル類の毒成分を貯めた防御用の毒の2種類の毒を持つ。

本州、四国、九州に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

ニホンマムシ

Gloydius blomhoffii (Boie, 1826)



昼間に活動していた成体 田辺市 (KT)



黒っぽい体色の成体 田辺市 (MI)



夜間に移動していた若い個体 高野町 (KT)

全長 30 ~ 70 cm。平地から山地に生息し、様々な環境で見つかる。体色は褐色で背面に暗褐色の斑紋が入る。斑紋は黒く縁取られ、中央に黒点が入る。様々な動物を捕食し、哺乳類や爬虫類、両生類、魚類の他に、ムカデ類なども食べる。また、毒を持つアカハライモリを食べることもある。胎生で8 ~ 10 月に2 ~ 9 匹の幼体を産む。幼体は3 ~ 4 年かけて成体になる。有毒。和歌山県ではハブ、ハビといった地方名で呼ばれることもある。琉球列島を除く日本全国に分布する。和歌山県では全域で普通に見られる。大阪府、奈良県、三重県にも分布する。

エラブウミヘビ

Laticauda semifasciata (Reinwardt, 1837)



幼体 広川町産 (MY)

捕食する。しばしば上陸し、岩陰などで休む。有毒。

琉球列島に広く分布する。本州で繁殖することはないと考えられる。和歌山県では漂着したと思われる個体が見つかることがあり、広川町や白浜町、串本町で混獲された個体が記録されている。

全長 90 ~ 140 cm。サンゴ礁が発達した浅い海などに生息する。体色は青褐色で褐色の帯状の模様が入る。幼体は成体よりも体色が鮮やか。4 ~ 12 月に 1 ~ 10 個の卵を海岸に産み、卵は 5 ヶ月程度でふ化する。様々な魚類を

ヒロオウミヘビ

Laticauda laticaudata (Linnaeus, 1758)



磯を移動する成体 白浜町 (AH)

岩陰などで休む。有毒。

琉球列島に広く分布する。本州で繁殖することはないと考えられる。和歌山県では漂着したと思われる個体が見つかることがあり、白浜町やすさみ町から記録されている。

全長 50 ~ 140 cm。サンゴ礁が発達した浅い海に生息する。体色は青色で黒色の帯状の模様が入る。春から秋に 1 ~ 6 個の卵を海岸に産み、卵は 6 ヶ月程度でふ化する。ウツボ類など、ウナギ型の魚類を専らに捕食する。よく上陸し、

クログシラウミヘビ

Hydrophis melanocephalus Gray, 1849



磯で見つかった成体 沖縄県 (IF)

全長 80 ~ 140 cm。浅い海の砂泥地などに生息する。頭が非常に小さく、体色は黄白色～灰白色で黒色の帯状の模様が入る。胎生で8～10月に1～8匹の幼体を産む。ウツボ類などのウナギ型の魚類を専門に捕食する。

一生を通して陸に上ることはほとんどない。非常に強い毒を持つ。

琉球列島に分布する。本州で繁殖することはないと考えられる。和歌山県では漂着したと思われる個体が見つかることがあり、みなべ町沖で混獲された、妊娠したメスの記録がある。

セグロウミヘビ

Hydrophis platurus (Linnaeus, 1766)



標本 (京都大学瀬戸臨海実験所所蔵) にフジツボの仲間のスジエボシが

全長 60 ~ 110 cm。沿岸から外洋にかけて生息する。体色は黄色で背面は黒色。胎生で1～7匹の幼体を産む。流れ藻などに集まる魚類を捕食するとされる。一生を通して陸に上る必要がない。本種の尾

付着していることがあり、そのような個体はウガと呼ばれる。有毒。

琉球列島を中心に広く分布する。本州で繁殖することはないと考えられる。和歌山県では漂着したと思われる個体が見つかることがあり、田辺市や串本町などから記録されている。

わかやまけん がいらいしゅ
和歌山県の外来種



ワニガメ *Macrochelys temminckii* 和歌山市産 (SM)



カブトノオイガメ *Sternotherus carinatus* 和歌山市産 (KT)



コーンスネーク *Pantherophis guttatus* 和歌山市産 (SM)

全国的に外来種は大きな問題となっている。和歌山県でも庭木や観葉植物とともに移動したと思われる外来種（ミナミヤモリ、ブラーミニメクラヘビなど）や、食用目的で導入された外来種（ウシガエル、スッポン類）などが知られている。最近、特に問題となっているのがペット由来の外来種である。日本はペット輸入大国で、世界中から様々な両生類・爬虫類が輸入されており、それらが捨てられたり、逃げ出したりして、野外で発見される例が増えている。和歌山県でも写真の種の他に、リクガメ類やグリーンイグアナなどが記録されている。このような外来種は在来種の捕食のほか、病気や寄生虫の媒介など様々な問題を起こしている。ペットは最後まで責任を持って飼おう！

あとがき

両生類・爬虫類は、もっとも身近な動物の一つですが、種名を調べることは簡単ではありません。なぜなら、よく似た種類が多く、さらに和歌山だけでも約 50 種もの両生類・爬虫類が記録されているからです。『和歌山の両生類・爬虫類の種類を簡単に調べることができる図鑑が欲しい!』。その思いから作り出されたのがこのハンドブックです。本書は生態写真に加えて、各種の特徴を押しこめた写真を豊富に掲載し、分類や分布情報などの最新の研究成果も反映しました。両生類・爬虫類をこれから学びたい人でも、できるだけ簡単に種名を調べることができるよう心がけました。より専門的に学びたい方には、下記の参考文献もおすすめてです。また、和歌山県だけでなく、大阪府南部、三重県南部、奈良県南部といった紀伊半島全域に対応しているため、これらの地域の方々にも本書をご利用いただければ幸いです。

皆さんの周りにはどんな両生類・爬虫類がいますでしょうか？このハンドブックを片手に観察へ出かけよう！

謝辞

当館の活動にご協力頂いている皆様に感謝いたします。有本 智氏、入江正己氏、佐藤広康氏、富森祐輔氏、榎引颯太氏、小寺昌彦氏、吉田 誠氏、紀宝町ウミガメ公園、日本ウミガメ協議会には写真を提供していただきました。京都大学瀬戸臨海実験所には標本の撮影にご協力いただきました。お礼申し上げます。

なお、本ハンドブックに使われたオオダイガハラサンショウウオの写真は、和歌山県文化遺産課より特別の許可を受けて撮影を行いました。

参考文献

- カエル探偵団．2020．**見つけて検索！日本のカエルフィールドガイド**．文一総合出版．
- 松井正文・前田憲男．2018．**日本産カエル大鑑**．文一総合出版．
- 日本爬虫両棲類学会．2019．**新日本両生爬虫類図鑑**．サンライズ出版．
- 関慎太郎・疋田努．2022．**野外観察のための日本産爬虫類図鑑 第3版**．緑書房．
- 関慎太郎・松井正文．2021．**野外観察のための日本産両生類図鑑 第3版**．緑書房．
- 田原義太慶・福山伊吹・福山亮部・堺淳．2024．**日本ヘビ類大全**．誠文堂新光社．
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研一・関慎太郎．2009．**決定版日本の両生爬虫類**（初版第6刷）．平凡社．
- 和歌山県．2022．**保全上重要なわかやまの自然 和歌山県レッドデータブック [2022年改訂版]**．和歌山県．

執筆者紹介 (カッコ内は執筆した種・分類群、項目)

高田 賢人 (アフリカツメガエル、ヒキガエル属、淡水棲カメ類、トカゲ類)

和歌山県立自然博物館、両生類・爬虫類担当学芸員。専門はカエルや甲殻類の系統地理学。好きな生き物はオオダイガハラサンショウウオ。

中津 元樹 (有尾目、アフリカツメガエル・ヒキガエル属を除く無尾目)

大阪府在住。日本爬虫両棲類学会会員。主な活動は東海・近畿のサンショウウオやカエルの生態・分布調査。好きな生き物はマホロバサンショウウオ。

福山 伊吹 (ヘビ類)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林 JSPS 特別研究員。専門は爬虫両生類の系統分類学。好きな生き物はタカチホヘビ。

平井 厚志 (ウミガメ類)

すさみ町立エビとカニの水族館 館長・学芸員。ライフワークとして和歌山県内のウミガメ類や沿岸環境を調査している。好きな生き物はアカウミガメ。

松野 茂富 (各種の見分け方)

和歌山県立自然博物館、昆虫担当学芸員。専門はヒロバカゲロウ類の分類学。好きな生き物はセトウチサンショウウオ。

和歌山県両生類・爬虫類ハンドブック

2025年3月31日 初版 第1刷発行

編集 和歌山県立自然博物館

発行 和歌山県立自然博物館

642-0001 和歌山県海南市船尾 370-1

TEL: 073-483-1777

<https://www.shizenhaku.wakayama-c.ed.jp/>

印刷所 中和印刷紙器株式会社



